

すでに制空権は失われつつあったので、全行程が夜行軍で、日没と共に進発し、夜明けに大休止となり野営である。

敵戦闘機の機銃掃射、新四軍（現中国共産軍）の追撃砲による奇襲、峻険の登行や渡河、膝を没する泥濘悪路の雨中行軍など、まさに人馬一体の悪戦苦闘を経ること三カ月半にして、戦線縮小のため前線から撤収した第十九連隊本部によりやく合流したのは七月中旬で、湖南省衡陽の山中であった。

それから反転作戦と行軍、そして終戦、長沙城外の一夜では死の思い、洞庭湖畔における武装解除、愛馬「青嵐号」との訣別、日本軍馬飼育指導のため国府軍との五十日間におよぶ行軍、芦山北麓の捕虜生活、痔疾による野戦病院入院、戦友の病死、帰隊と連隊本部の復員業務の勤務などを経て、上海から復員船に乗船、奇しくも誕生日である昭和二十一年六月三日佐世保へ入港したのである。

長崎県佐世保市南風岬はえのさきに上陸し帰郷したのであるが、この間終戦の日から教えて十カ月であった。五十年は

茫々たりといえども、目をつむれば、戦野の山河今もなお、わが眼底に彷彿として去来するのである。

洞庭湖畔賦

茫茫四十五星霜 枯骨啾啾岳陽道

山河不变青一色 洞庭湖畔哭薰風

—平成三年五月、現地慰霊の旅にて—

支那事変当初の

太原攻略戦

島根県 足立 信義

現役兵当時

私は京都の御所で昭和天皇の御即位の大典のあった昭和三年の現役兵です。全国民が御慶祝に沸き立った年でした。

当時の現役兵の教育訓練は平時の厳格な訓練で、内務は想像に絶するつらいものでした。

現役二カ年を終えて満期除隊後、昭和六年十月召集で、関西地区で行われた特別大演習に参加しました。

参加師団四個師団の大規模なものであり、演習終末の両軍の生駒山争奪戦はすさまじく、山頂占領の登攀競争はその後の実戦にも、ついに体験しなかつた凄い闘志に溢れた演習でした。当時の日本国内に、擡頭しつゝあつた軍国主義への世相が偲ばれます。

事変当初の赤紙召集

昭和十二年七月二十七日、支那事変勃発と同時に町内七人も召集令状を受けました。前例のないこと故、町中大騒ぎとなりました。本人の私自身も啞然となりましたが、時間の経過と共に自分の置かれた立場を白覚してきました。自分亡き後の家族の事など心配の種は沢山ありましたが、「お国のため」と万事割り切つて覚悟を決めました。

日露戦争以来の赤紙召集に駅頭に黒山と集まつた見送りの人々の中を勇躍、郷里を発つて、浜田歩兵第二十一連隊へ入隊しました。連隊も平時から動員の十分な計画準備はしていたものの、今次のごとき大動員は

初めてのことであり、火事場のような混雑でした。浜田連隊で直ちに出征するものと覚悟して入隊しましたが、意外にも第一次、第二次出征組から残置され、十月に補充要員として浜田を出発、下関で「加洲丸」に乗船、十月十三日支那塘沽に上陸、列車と行軍で天津・大同を経て、原隊が苦闘を続けている山西省の奥地へ、山脈と荒地の続く広野を越えての追及行軍が続きました。

飲料水は白濁しているし、御飯はその都度、飯盒炊事、宿泊は避難した住民の空き屋で雨露をしのぎ、お菓は付近を探して現地徴発に頼る以外にない毎日でした。

前線に追及

十月三十日、連隊が目下苦闘を続けて攻撃中の山西省忻口鎮で連隊旗を拝することができました。感激の一時です。私は第三大隊第十一中隊に編入されました。原隊当時の懐かしい顔が私を迎える。彼らが語る上陸以来二カ月の苦闘の数々のなかで、散華した人々の中に懐かしい人の名が出る度に人命のはかなさと、明日

の我が身を思い、また郷里の妻子に思いを馳せるのでした。

第三大隊はここに至る途中の平型関口において優勢な敵陣地に激突し、山頂の敵陣地を辛うじて占領した各中隊は各々敵の包囲下におかれ、相次ぐ敵の逆襲を受け、大隊幹部ごとごとく死傷し、兵力も三分の一に減少する損害を受けながらも、よく占領し陣地を確保しました。後日、方面軍司令官寺内大将の感状を受ける偉勲を樹てた大隊であつて、忻口鎮の攻撃に当たつては予備隊に編入されていきました。

下玉庄の戦闘

連隊の第一大隊は、忻口鎮の敵陣地攻撃の左第一線の攻撃部署を予定されていましたが、十二日夜攻撃配置に赴く途中、忻口鎮の敵陣直下にある下玉庄部落で兵力二千人の優勢な敵が、堅固な高さ四メートルの壕を囲んで潜んでいるのに深夜不意に遭遇し、突入の反覆で死傷続出し、まず第一中隊が全滅の危地に追い込まれ、急報に接した大隊は、全力を挙げて攻撃に移つたが、死傷続出するも敵、頑として反撃を繰り返すの

みであつた。

十六日に至り、砲兵及び飛行機による砲爆撃が行われ、十七日夜間に至り敵が撤退し、大隊は連隊の指揮下に復することができたが、大隊長山口少佐をはじめ多数の戦死傷者を出し、大隊の戦力は急減し、連隊の最後の忻口鎮攻撃に思われない支障を出したのであつた。

忻口鎮 敵第一線陣地攻撃

敵の布陣する忻口鎮付近の地形は、一帯の高地が段々畑状に山頂へと続き、その間に所々に地隙あり断崖あり、敵陣地から斜射、側射に便なる地形であつた。この陣地を占領している敵は五個師団を主力とした優勢な兵力であり、これに対して我が軍は、上陸以来、長い戦闘の連続で、兵力を消耗した五個師団と配属の一個旅団の兵力である。

忻口鎮敵主陣地に対する攻撃は、当初、十三日払曉と予定されていたが、直協砲兵との連絡、攻撃部隊の第一大隊の下玉庄における思いはない。敵との交戦による兵力の減少と日時の経過等で十五日午後四時に第二大隊を主攻撃部隊として開始したが、意外なほど頑

強に抵抗する敵の猛射、逆襲の反覆、直協砲兵も途中弾薬の補給が続かず、大隊長中島少佐、宇野大尉の戦死等死傷続出し、藤村大尉が指揮を代行し、占領した高地を辛うじて確保するにとどまる状況。

十六日午前二時三十分、月が没する時間、敵は全線にわたり猛反撃を開始、手榴弾を投じて突入を繰り返し、我が軍はこれに射撃と白兵で撃退、ためにさらに兵力の減少を来たし、一部占領陣地を縮小確保せざるを得ないような結果も生じてくる状況に至った。

陣地内最高峰への突入成功

十八日払暁、旅団司令部に勤務していた犬塚大尉は、連隊幹部の死傷が多いため、自ら志願して連隊復帰を申し出て、師団長の許可を得て第一線両隊長を指揮することにになった。大尉は直協砲兵の協力は期待するに足らずと考え、連隊の連隊砲中隊長荻野大尉に歩兵砲も合わせ一括指揮させ、なるべく歩兵一線に近接協力するよう命じ、忻口鎮敵陣地最高地に対し攻撃を発起した。

敵の第一線は、手榴弾を乱投しながら猛射を我に浴

びせ、また、後方迫撃砲陣地よりの急射により我が部隊の突撃は一時頓座するかに見えた。がこのとき、意外にも第一大隊副官新田少尉が突如として前線に現れ、軍力を抜いて真っ先に敵人に突入、犬塚大尉は突撃ラッパを吹奏させて自ら荻野大尉と共に敵陣に突入、かくして最高峰の奪取に成功したのであった。

敵兵、後退開始

二十日夜、敵は七回にわたり、我が占領せる陣地に逆襲を反覆して来たが、その都度、残存火力をこの敵に対して集中させ、随所に白兵を揮ってこれを撃退した。

夜が明けると、陣地前の視界一帯は敵の遺棄死体全く地を覆う惨状を目撃したのであった。

連隊も第一線の兵力二百十名に激減し、前線を北支駐屯の萱野部隊と交代した。

爾後、忻口鎮の陣内戦は十一月一日に至るまで膠着状態であったが、同日夕刻、敵は総退却を開始し、全陣地を放棄し、一斉に、太原城に向かい後退を開始した。

太原城攻略戦

十一月三日の明治節を、激戦の跡の忻口鎮高地で迎えた。ここで補充要員の充足を終わつた連隊は、一部は自動車追撃隊となり、私たち連隊主力は行軍で追撃に移る。車両部隊、鞍馬部隊、徒行部隊、進撃する道路は混淆して言語に絶した混乱である。

歩兵部隊は日夜の区別もなく、耐久の進軍は怒涛のごとく太原城を目指して進んだ。

太原城は山西モンロー主義を唱える閻錫山將軍の拠点で、城壁の高さ十メートル、上幅七メートルの堅固なもので、師団は当初軍使を派遣して無血入城を予定していたが、敵は約束に反して城門を固く閉ざして頑強に抵抗を示したので、攻略することに決定した。我々攻撃部隊は後方で背囊を残置して軽装で北面西角の最も堅固な大北門への攻撃が部署とされ、城壁から三百メートルくらい離れた位置に散開して攻撃準備の配置に着いた。

十一月八日午前十時二十分、砲兵の支援射撃下一斉に各個躍進で城壁直下の敵の空濠の線にたどりついた

と同時に、大小両北門付近からの側防火力と頭上の城壁から撃ちおろす射弾に中隊は濠底に伏せたまま死傷者続出、全く身動きできず、突撃の機を待つのみ状況となった。

そのとき、私は炸裂した敵砲弾の爆風に吹き飛ばされて、再び起立しようとしたが、起き上がる事ができず、左右に爆破する手榴弾の中を思わず念仏を唱えながら、傍らの戦死者を模して敵の狙撃から脱するよう、じっと痛さに耐えて伏せていた。隣接する第十中隊は重砲の協力射撃により城壁の突破口の突入に成功、我々第十一中隊も続いて城内に突入。かくして太原城を完全に手中に収めることができた。

太原において上陸以来の連隊の英霊六百柱の内地への無言の凱旋を見送った。上陸以来四カ月の短期間の犠牲者であり、これに数倍する負傷者の数は太原攻略線までの連隊の善戦苦闘を示すものであった。またこれを迎える郷里の多くの肉親の方々の心情をしのび、前線に残る兵士の心境も、征途の早期終了と妻子のも

とへ無事生還の日を心から神に祈るのであった。

連隊長の交代

十一月二十二日まで太原に駐留していた師団は、新任務のため保定に移動することになり、途中、娘子関、石家荘を経由し行軍と列車輸送で保定に移動した。私は太原で負傷、病院に入院していたため残留されたが、少し遅れて列車輸送で保定で中隊に復帰した。保定において我々が慈父のように慕っていた栗飯原連隊長を送り、片野定見大佐を後任として迎えました。栗飯原連隊長は武勳赫々たるにもかかわらず内地への帰還は、作戦中、北支方面軍参謀として前線を回り、その強引な作戦指導を繰り返した辻政信参謀と、その都度意見を異にして譲らなかつたことが原因との噂が兵の間に流れた。

山東省莒県城攻略

保定でしばらく駐留していた部隊は、この間さらに教育訓練を重ね、昭和十三年の正月を保定で迎えた。一月八日に保定を出発後、徒步行軍で途中残敵の掃討を続けつつ南下を続け、済南―青島間の鉄道膠濟線の

警備と付近の掃討の任に就いた。

三月二十日、部隊は隣接する第十師団の作戦援護の目的で莒県城を攻撃することになった。莒県城は城壁の高さ八メートル正面幅九百メートル、城壁の外周を水濠を巡らす堅固なもので、守る敵は砲を有し頑強に抵抗し、かつ城外の敵部隊と通じ我が部隊に襲撃を試み、ために混戦状況続出し、整齊とした統一攻撃ができず、一時混乱したが、二十三日払暁を期して攻撃を再開することに決した。

前夜、中隊長は全員に対し攻撃部署を明示し、徹底を期した上で水盃を汲み、恩賜のたばこを回し飲みさせ各自に遺書を書かせ、中隊の全員に決死の覚悟を促したのであった。その夜の兵士は夜が更けるまで、あれこれと考え込んで寝についた。

翌朝六時五十分、山砲の集中射撃の下をかい潜り梯子三組を城壁に掛け、第一大隊副官新田少尉またも先頭に突入を敢行し、同時に我が第三大隊も城壁西北角の突入に成功、九時三十分完全に城内を占領したのであった。部隊はさらに付近の敵を求めて攻撃を続行中、

三月四日、葛溝鎮で敵と遭遇した。発見時、敵との距離百メートルくらいで敵兵の左右に動くのが手に届くように見えた。

至近弾が身辺に集中する。中隊長西山大尉も既に抜刀して散兵を鼓舞し、これに応じて各個躍進中、身辺に炸裂した迫撃砲破片を左足に受け倒れる。重傷者もいるので担架を断って銃にすがって衛生隊まで自力で後退する。爾後、前線に近い病院から後方の青島の野戦病院、さらに広島陸軍病院を経て大津の陸軍病院で三カ月の長期の療養後、昭和十三年八月二十七日治癒、補充隊に復帰、除隊したのである。この間各病院で我々の受けた銃後の皆さんの慰問は大変なものでありました。

家族との生還対面は、前線で夢にまでみた妻子、両親を現実としてこの手で抱き止めることができたのである。

再度の召集

昭和十九年三月、戦局はいよいよ難しくなる気配の高まるとき、三十七歳になった私に再度の召集がくる。

西部七一九三部隊に入隊した。この部隊は師団長直轄の広島市海江田にある陸軍倉庫の防衛が任務であり、この倉庫は前線部隊への一切の物質の補給基地となっていて勤務は前線同様実弾を保持しての部隊であった。原爆投下の日は私は仙崎港（山口県）倉庫の先任上等兵で、衛兵司令として分遣勤務中で被爆から免れた。

【解説】

第五師団は支那事変開始以降、日本国軍の精鋭師団としてこの山西省進撃作戦、次いで徐州会戦、南支の広東上陸作戦、ノモンハン事変への救援、南寧攻略戦、シンガポール攻略戦、終戦前の北豪アル諸島の防衛と絶えず南に北に転戦に転戦を重ね、偉勲を樹立した師団である。